
ある晴れた日の約束

榊梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある晴れた日の約束

【Nコード】

N0645M

【作者名】

榊梨

【あらすじ】

舞台は現代日本、御影町というところある町。そこは昔からの言い伝えが数多くある土地であり、今もなお、謎の現象が多発している町である。そしてこの物語は様々な異能の者が行き交うよくわからない物語なのである。

第零話『魔導書〜Necronomicon〜』（前書き）

不定期更新につき、しばらく投稿がなかったり、投稿が多かったりします。

第零話『魔導書』Necronomicon』

雪…… それは夢い願い……

第零幕 『魔導書』Necronomicon』 ネクロノミコン

人は何かを背負いながら生きている。

それは希望や願い、また絶望や怨み、それは人それぞれだろう。ただ、それでも何かしらは背負っている。

なにも背負っていない者はこの世にいない。

「俺はそう思っている」

と睦月^{むつき}彼方^{かなた}は雪が降っている中、この鳴龍^{めいりゅう}神社を見上げながら思っていた。

「よ、この不良教師」

そう声が後ろからしたかと思うと、突然茶髪の男が勢いよく肩を組んできた。

それは結果的に彼の首を絞めるような形になったのは言うまでもないが。

「オイ。首を……」

まあ彼は首を絞めるつもりでやったわけじゃないんだろうけど。

「ん？」

首を絞められた側からしてみれば結果が重要だったりする時もある。

「締めんなああああああー!!」

肩にかかった手を掴みそのまま思いつきり背負い投げ……

「ちょ、ちよつと待てええええええ〜!」

案の定、茶髪の男は何の抵抗もできずにそのまま宙に飛んでいく。

「おー、よく飛ぶなあ」

それにしても飛びすぎでしょうに。

ちなみに今の茶髪の男は如月道隆きさらぎみちたかという彼方の教師仲間もとい悪友だ。

「誰が悪友だ。誰が」

と、今まさに飛んでいった方向から道隆が戻ってきた。

「ん、なんだ、もう戻ってきたのか（……ち、結構頑丈にできてるな）」

「おい、今舌打ちしなかったか？」

そして彼は案外耳がいい。

「さて、掃除するか」

そんな道隆を無視して彼方は神社の戸を開けて中に入る。

「華麗にスルーかよ。……カレーにスルー。今日はカレーでも食べて帰るか！」

「うるさいぞ、お前」

彼方は道隆に向かって手にした竹たけ簞ぼうきを投げる。

「痛っ」

いや、それくらい避けようよ。

「うるさいって、せっかく手伝いに来てやったってのにそんな言い方はないだろ」

（誰も頼んでないっての）

頼んでないのならなぜ簞を投げたよ、彼方さん。

鳴龍神社。

この御影町に古くからある『願いが叶う』として有名だった神社。しかし、十数年前から神主一家が失踪しているため、ろくに管理されず神社としての機能が失われつつある。それでも彼方が月に一度清掃に来ているため、廃れるということは未だない。なぜ彼方がわざわざ清掃に来ているかというのはまたあとで説明するとしてよいか。

「それにしても毎度毎度よく懲りずに来るよな。いつ帰ってくるかもわからない奴なんかのために、よく毎月掃除する気になるな」

「別に。そんなの俺の勝手だろ」

道隆が中に入るとすでに彼方は掃除を始めていた。

相変わらずほとんど事を進めていく奴だ。

「そりやそうだが、この奴が失踪したのってお前が十二歳くらいの頃だろ。もう十年も経ってるんだぞ、いいかげん諦めたらどうだ？」

「……」

十年前、彼方はこの神主 来瀬川家の二人娘である姉の未緒と妹の皐月と仲がよかった。

というかその頃から親と死別していた彼はよく彼女たちの親に世話になっていた。

当時三人はとても仲がよかった。とはいっても、三人とも他に友達というものが居なかったただけなのだが。

しかしそれも長くは続かなかった。

ある日を境に来瀬川家は一家全員姿を消した。

そして恐らくその原因は

「俺…、なんだろうな…」

いつの間にか彼方の手は止まっていた。

（あーあ、また昔のこと思い出してるよ）

少し遠くから横目で彼方のことを見ていた道隆はあることに気がついた。

というか突っ立っているだけだけど、君は手伝いに来たんじゃないのかよ。

「なあ、物思いに沈んでいるところ悪いんだが」

「ん、ああ。なんだ？」

その言葉で物思いから戻ってくると同時に彼は掃除を再開する。

「おまえ、この前もここに来たのか？」

「は、なんで？」

先ほども言ったとおり彼方は月に一度掃除には来ているが、それ以外ではほとんどここには立ち寄らない。これは道隆も知っている

ことだ。

「いや、そこ。お前の後ろ少し上に真新しい本が落ちているんだよ」
道隆が指を指した先には普通なら見つからないような分厚い本が一冊落ちていた。というより引つかかっていた。

「これか」

彼方は手を止めその本を手にとった。

……意外と重い。

「それってお前のじゃないのか？」

「いや、いくら俺でもわざわざこっちにまで本持ってこないさ。それに本はこんな扱いをするもんじゃない」

ただそれはあまりにも異様な本だった。

鎖と布によって嚴重に施錠せじょうされていたのだ。

故に道隆が見つけることが出来たのだろう。

「そか」

それにしてもこの施ほどこしような異常だ。

たかが本にこんな嚴重に施錠するわけがない。

だが、一部布がめくれているところを見て彼方は違和感を感じた。

「でもそれってお前が読む本になんとなく似てるよな。なんていったつけ、あのネクロ……」

違和感の理由。

そう、本来それはここにあるはずのない書物。

禁断の書物。

「ネクロノミコン
死霊秘宝」

ト Be Continued

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645m/>

ある晴れた日の約束

2010年10月28日07時48分発行